

資料：韓国の「青年左派」ホームページより抜粋翻訳

韓・日青空共同行動韓国側企画、青年左派（準）中央執行委員 チュ・プリン

第二次世界大戦の太平洋戦線。日本帝国は破竹の勢いで南太平洋の国を占領していった。しかし、1944年にマーシャル諸島強襲を皮切りに、フィリピン海戦とレイテ海戦まで米軍の数回の攻撃で南方戦線が崩壊し、日帝は条件付き降伏を準備する。朝鮮、台湾、満州国など、真珠湾空襲と日中戦争前の植民地を占領地と認め南太平洋からだけ撤退することがその条件であった。

これは、米国と連合軍の立場では話にならない内容だった。米国は、日本の無条件降伏を受け入れるために、日本本土上陸作戦（Operation Downfall）を準備していた。しかし、1945年6月までに硫黄島と沖縄の戦闘で多大な死傷者が発生したうえ、本土直接攻撃は、多くの負担が続いたため、作戦はキャンセルされる。

これらの情勢から1941年から日本と不可侵条約を結んでいたソ連は、一斉に1945年5月、ドイツの無条件降伏をきっかけに、極東戦線に介入しようとする。西部の安定を取り戻した後、痛む歯を抜くことができたソ連は、3ヶ月間戦列を整えて関東軍を対象に、満州地域の全面攻勢を準備した。

米国は超大国ソ連が南下して太平洋と接した極東の戦略的利益を占めることを牽制する必要があった。没落作戦もキャンセルされた状況で、米国はそのために戦争遂行中に作っておいた新型兵器を実戦投入することを決定する。

<Nuclear Lunch Detected - 新しい時代の幕開け>

米国は、①日本本土に直接に、②一度も爆撃を受けていない場所に、③核爆弾の威力を示すことができ、④連合軍捕虜も少なく、さらに⑤爆撃の意味がある中型都市に爆弾を投下することにする。当時、日本の軍需都市であった本州南西部の広島と長崎が適格な場所選ばれた。

1945年8月6日08時45分。B-29爆撃機の日本の本州南西部広島にウラン235原子爆弾「リトルボーイ」が投下される。生存者の証言によると、キノコ雲がたち四方が黒く変化し、瞬く間に人々は乗って灰に変わった、四方八方から悲鳴とうめき声が聞こえた。都市のビルから山川草木まで完全に廃墟となった。都市の7~80%が無くなった。高い熱により気温が上がり、水分が蒸発した。数時間後、水分が蒸発した上空から雨が降った。黒い雨であった。喉の渇きに苦しめられた人々は、高濃度の放射能の雨を飲んで死んだ。

続いて8月9日長崎にプルトニウム原子爆弾「ファットマン」が落ちる。爆心地に山地が多かったため、広島1/4の被害にとどまったが、それでもやはり史上初の災害だった。

同じ日に、ソ連は待ちかねたように満州に進撃して関東軍を攻撃する。日本は8月15日無条件降伏を宣言し、日本は米軍の兵站基地となった。

人の頭の上に、実際に核爆弾を落としたのは初めてだった米国は、核による2次威力とその被害の詳細を知らずにいた。核爆弾の関係者は、日本の焦土化に痛快な歓声をあげた。まるで日本だけが、人類が一度も経験できなかった苦痛に苦しんでいるように見えた。しかし、放射能は様々な場所で様々な被害を作った。日本を相手に投下された核爆弾は、つまるところ人類の歴史を変えた。

1953年12月8日、アイゼンハワー米大統領はUN総会で、軍事目的ではなく、発展的な目的の原子力のサポートをするという内容の「平和のための原子力 (Atom For Peace)」を発表する。米国は、地球のあちこちに低価格で核を供給した。同じ時期、日本の議会は「悪魔の予算」という市民の抵抗に屈することなく、立て続けに8つの原子力関連法案を成立させた。地球のあちこちに「善良な核」という名分で原子力発電所が建設された。そして核はすぐに人間の同伴者になった。

<「その悪魔が使った最も優れた詐欺は、世界中が自分が存在しないと信じさせたことである。」>

2011年には、善良な核は悪魔になった。福島原子力発電所は、リトルボーイの200倍の放射能を噴出し始めた。政府とメディアは混沌に陥った市民に「日本は安全である、福島は安全である」と騒いだ。福島は安全だと毎日のように放送で話していたアナウンサーが、ある日突然故郷に逃げ出して「怖かった」と告白した。

怖いのは核自体ではなかった。日本政府は、社会の「公の秩序」のために支配者が「秘密」を定義することができる「秘密保全法制」を推進し始めた。この法律によると、今後、日本の放射線レベルを測定したり、インターネット SNS、ブログを通じて拡散すると、10年の懲役刑を受ける可能性がある。厳然とこの世に存在し生命を破壊している「それ」を「存在しない」とオウム返しにずっと繰り返すことは、見ようによっては国際市民、あるいは地球人に与えられた「本分」であるかもしれない。

韓国にも「それ」の足跡は、全土に印されている。密陽と青島の送電塔、既存の原子力発電所の寿命延長、新規原子力発電所の建設、核廃棄物処理場など原子力発電から派生する旺盛な繁殖力まで。核賛成論者たちは電力需給不安定を語りながら原子力発電所の増設を主張している。一部の人々は、北朝鮮が引き続き核実験をしているから、私たちが核兵器を作ろうと主張しさえする。

そして彼らは、「北朝鮮の核」のような言葉で再び核を区分する。彼らは「悪い核」をより警戒しなければならないとう扇動を通じて、まるで「善良な核」があるように偽装する。

<しかし、それは本当に悪魔だったのか>

リトルボーイが落ちた場所は島外科病院だった。都市の 90%の医師と 93%の看護師が死亡したり負傷した。死傷者のほとんどは一般市民だった。1950年までに被爆死亡者と推定される 20万人のうち、4万人が強制徴用された朝鮮人である。そして生き残った被爆朝鮮人 2万人は朝鮮半島に帰ってきて透明人間として生きた。これは、計画された悪意だったのだろうか。米国では、医師と一般市民を大量虐殺するために核を使用したのだろうか。日本は世界に放射能をまき散らすために福島原子力発電所を作ったのだろうか。

悲劇は、計画されたものではなく、ただ必然的に伴っただけである。70年にも及ぶ核の時代が与える真の教訓は、「核には人格がない」という事実だけだ。「善良な核」のようなものはそもそも存在しなかった。

今年、広島 68周年を迎え、意味のあるイベントが開催される。「No more 広島、No more 福島」、そして「核には人格がありません」をテーマに繰り広げられる'8.6青空共同行動「は、核の時代を今、幕を下ろすことを要求する国際連帯行動です。私たちは、今になって「核には人格がない」というあまりにも当たり前の事実を告発しようとしている。「善良な核」はない。核を「善良に使用」することも不可能である。核の力が強く、その影響が果てしないのは、それが人間の「計画」をはるかに超えた存在だからだ。

2013年8月2日



푸른하늘 공동행동
No more HIROSHIMA, No more FUKUSHIMA

오는 8월 6일, 한국과 일본 양쪽에서 히로시마 참극을 기념하고
핵 없는 사회를 기원하는 "푸른하늘" 공동행동이 개최됩니다.
푸른하늘 공동행동 한국 측 기획단은 "No more 히로시마, No more 후쿠시마" 그리고
"핵에는 인격이 없습니다"를 모토로 서울시내에서 가두행진과 심포지엄을 열 계획입니다.
우리는 이 공동행동에 함께하기를 제정당과 시민단체들, 그리고 이 글을 읽으시는 여러분에게 제안하고 있습니다.
그리고 거침없는 후원도!

공식 트위터_ @blueskyact
문의메일_ blueskyact@naver.com
문의전화_ 02-3144-1984

후원계좌_ 국민 206001 04 116395 권유리(푸른하늘)
소셜펀치_ www.socialfunch.org/nonuke

푸른하늘 푸른하늘 공동행동

【コラム】広島が生んだ二つの世界、二つの人生

キム・ソンイル | 青年左派（準）代表、青空共同行動推進委員会

<広島が生んだ二つの人生>

今年7月6日、83歳の高齢者が死亡した。名前は山口仙二。平和運動家であり被爆者。1945年、長崎に落とされた核爆弾に被爆した後、今日に至るまで、核の時代を体に刻んで生きてきた人である。

高校1年生だった山口仙二は、核爆弾が落ちたところから1.1 km地点で働いていた。キノコ雲とともに友人が消え、彼は上半身の重度の火傷と肺機能障害を得たまま生き残った。二十歳の夏、もはや生きていけないと思ってかみそりで手首を切った。しかし、死ねなかった。シャツが血で固まった目が覚めた彼は、「また、生き残った」と思った。その時から、被爆者として世に対抗し始めた。

1955年には、身体的苦痛や社会的偏見に対抗して戦って「長崎原爆青年会」を構成し、被爆者運動を本格的に開始した。30年後の1982年、彼は被爆者として初めて国連の演壇でスピーチになった。演壇で彼は被爆当時の自分の悲惨な姿を写した写真を持って絶叫するように叫んだ。



「私の顔と手をよく見てください。よく見てください。世界の人々、そしてこれから生まれてくる人々、子供たちに、私たちのようなこのような被爆者と核兵器による死と苦痛を被ることはたった一人でも許してはなりません。核兵器による死と苦しみは、私たちが最後になるように、国連が厳粛に誓い下さる心よりお願い申し上げます。私たち被爆者は訴えます。命がある限り、私は訴え続けます。No more 広島、No more 長崎、No more war、No more 被爆者！」

彼はその演説のように、命が残っている間、継続して「No more 広島、No more 長崎」を叫びつづけて、平和活動家として死んだ。

山口仙二を平和運動家にさせたキノコ雲は、他の場所で正反対の人生を作り上げた。広島地図から消してしまうような核爆弾の恐ろしい力を見ながら、海軍将校中曾根康弘は、核に傾倒した。彼は遠く離れた艦船からキノコ雲を見ながら今後の核の時代になるだろうと考えた。

山口仙二が長崎原爆青年会を創設した1955年、衆議院議員になっていた中曾根康弘は「原子力基本法」を上程した。彼は「悪魔の予算」という市民の抵抗に屈することなく、立て

続けに 8 つの原子力関連法案を成立させた。読売新聞の社主、正力松太郎と一緒に「核の平和利用」のための大講演会を開くなど積極的に核開発を広報した。「善良な核」の象徴である「鉄腕アトム」が生まれたのもこの時期。日本政府は、アトムを利用して原子力発電所を積極的に広報した。

写真左が中曽根康弘。



中曽根康弘は、以降、日本の総理まで上り詰め、日本を世界第 3 位の「原子力大国」にした。彼の年齢は今年で 95 歳。山口仙二は死んだが、彼は生き残った。福島事故が起きた直後、彼は、韓国の中央日報とのインタビューで、「今回の事態で、日本のエネルギー政策を変えるべきだと思うか」という質問に沈黙で答えた。

<核が生んだ二つの世界>

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分朝の通勤の途中で、世界初の原子爆弾「リトルボーイ」が広島市の中心部に投下された。広島市の人口 34 万人のうち、約 7~8 万人がこの日、死亡した。この年の年末までの 4 ヶ月間、放射能被害で死んだ市民は約 9~14 万人。都市の建物の約 69%が完全に破壊された。そして、この事件は世界を二つに分けた。

核の時代を知らせるこの事件についての人々が見せた反応は非常に違っていた。8月8日、東京のラジオでは、「人、動物、すべての生命を持っているのが、文字通りの死の中に焼かれました」というコメントで絶望を伝えた。そして 8 月 10 日、パリのポスト紙の特集号では、「JAPS QUIT」という文字がでかでかと躍った。巨大な絶望と興奮。この二つの感情は、核の時代を見て 2 つの観点として持続した。その分断はまるで国境の問題であるかのように見えたが、そうでなかった。



左は被爆被害者が描いた絵、右は長崎原爆投下に歓呼している米軍人たち

リトルボーイが落とされた場所は島外科病院だった。都市の 90%の医師と 93%の看護師が死亡し負傷した。死傷者のほとんどは一般市民だった。1950 年までに被爆死亡者と推定される 20 万人のうち、4 万人が強制徴用された朝鮮人だった。そして生き残った被爆朝鮮人 2 万人は朝鮮半島に帰ってきて透明人間として暮した。かれらを襲った核爆弾を「善良な核」として教える学校に子どもたちを送りながら。被爆しなかった韓国人は核爆弾の意味を「日本の敗戦と朝鮮の解放」と理解した。世界第 2 位の被爆国である韓国で、核の恐怖はほとんどなかった。韓国人たちが恐れる核とは、「北の核」程度だ。「北の核」は悪い核だから。「善良な核」は怖くない。「善良な核」は必要である。それが多くの人々が持っている考えだった。多分それは日本でも同じだったのかもしれない。

2011 年、核の時代が始まっていた日本で再び大惨事が起こった。今回は「悪い核」ではなく「善良な核」によって。「平和的」であった福島原子力発電所は「悪い核」リトルボーイの 200 倍の放射能を噴き出して暴走した。日本の市民は再び街頭に出てきた。「安全神話は嘘だった」と書かれた旗を掲げて。

<核には人格がない>

毎年 8 月 6 日、広島市の平和記念公園内では、小さな集会が開かれる。被爆 2 世の会が中心となって開催される集会の名前は「青空（青空）」。「No more 広島、No more 長崎」をかけて毎年開いてきたこの集会は、今年は福島以降、核問題に敏感になっている日本の当局のおかげで「集会」という名前も付けられずに「青空式典」となった。

今年の「青空」は、「共同行動」という名前で韓国でも一緒に開催することになる。「No more 広島、No more 福島」、そして「核には人格がありません」というスローガンをかかげて。このスローガンが言いたいことは単純明確である。広島に落ちた核も、北朝鮮政府が作ろうとしている核も、福島を破壊した核も同じ核ということだ。そして、このイベントは「善良な核」と「悪い核」を区別するよう教育されて生きてきた今日の韓国人たちに投げかけられる質問でもある。人類は 70 年にも及ぶ核の時代を経て、悟った「核には人格がない」という事実を、韓国は今受け入れる準備ができているか？

蛇足：小さな組織ばかりが集まってイベントをすればお金が足りません。少ない金額でも良いから後援を待っています！ <http://socialfunch.org/nonuke> 2013年7月30日

[立場] 核には人格がない

- 核も、核が必要であると主張する人も安全ではない -
- 8月6日午後2時、緑の成長広報館の前で開かれる「8.6 韓日青空共同行動」に参加しましょう -

最近、日本の産業技術総合研究所が、福島原発事故の際に流出した放射能汚染物質を除去するのに天文学的な費用がかかるという事実を明らかにした。去る24日、日本のマスコミを通じて発表されたところによると、福島県の一ヶ所に必要な費用だけでも最大57兆ウォンがかかる。さらに、福島原発3号機の防護服も役に立たないレベルの放射能蒸気が出ていることが新たに確認された。このような渦中でも、核の危険性に対する不感症は相変わらずだ。

最近、韓国では原子力発電所の部品の品質証明書類の偽造で30社以上が家宅捜索された。政府と原子力マフィアは「安全な原子力発電」を語るが、実際に彼らにとって重要なのは安全ではなく、利益であることをよく示している事件である。核も、核が必要であると主張する人も安全ではない。

広島と長崎に落とされた核爆弾が核の世紀を開いた後、核は人類を絶えず脅かしてきた。各国の政府が主張してきた「核の安全な利用」、「善良な核」の正体も福島の事故で明らかになった。日本の民衆が主張するように、「安全神話は嘘だった」。

来る8月6日は、広島に最初の核爆弾「リトルボーイ」が落とされて68年目になる日だ。この日を記念して初めて韓日共同行動が行われる。「8.6 韓日青空共同行動」韓国側企画団はこの日のスローガンに「核には人格がありません」を掲げている。善良な核も悪い核も世の中には存在しない。核は解放軍でもなく、人類の友達にもなれない。

「核には人格がない」という明白な事実に同意するなら、8月6日午後2時、緑の成長広報館の前で開かれる「8.6 韓日青空共同行動」に参加しましょう。

2013年7月29日

青年左派（準）報道官キム・デファン